

P1-28 HIK1083 標識ラテックス凝集検査による子宮頸部胃型粘液産生腫瘍のスクリーニング

山梨大

大森真紀子, 端 晶彦, 奈良政敏, 深澤宏子, 平田修司, 星 和彦

【目的】悪性腺腫や lobular endocervical glandular hyperplasia (以下 LEGH) は子宮頸部胃型粘液産生腫瘍と考えられている。悪性腺腫や LEGH を細胞診検査や経腔超音波検査でスクリーニングするのは困難である。HIK1083 は胃型ムチンに対するモノクローナル抗体で、HIK1083 標識ラテックス凝集検査は簡便で迅速に胃型ムチンを検出できる検査である。今回この検査が子宮頸部胃型粘液産生腫瘍のスクリーニングに有用であるかどうか検討した。【方法】2000 年 8 月から 2004 年 7 月に当科を受診し、多量の水様性帯下、経腔超音波検査で子宮頸部の多発嚢胞、細胞診検査で黄色調粘液細胞集塊のいずれかを認めた 222 例と子宮頸部病変以外の疾患で子宮全摘術予定の 26 例で、頸管粘液を綿棒で採取し HIK1083 ラテックスキットを用いて検査した。全例でインフォームド・コンセントを得た。【成績】HIK 陽性は対象 222 例中 33 例 (14.9%) で、同期間中の子宮頸部細胞診症例 9,023 例の 0.37% に相当した。一方対照 26 例は全例陰性であった。細胞診で黄色調粘液細胞が認められた症例は 16 例あり全例 HIK 陽性であった。また水様性帯下 11/91 例 (12.1%)、子宮頸部多発嚢胞 13/128 例 (10.2%) で陽性であった。HIK 陽性 33 例中 20 例は悪性腺腫疑いあるいは子宮筋腫等の適応で子宮摘出術を施行した。病理組織学検査で全例 HIK1083 陽性組織を認め、悪性腺腫 1 例、LEGH 12 例 (このうち頸部腺癌 Ib 合併 1 例、AIS 合併 1 例、腺異形成合併 1 例)、胃上皮化生 7 例が認められた。【結論】HIK1083 標識ラテックス凝集検査で子宮頸管細胞の胃型細胞への化生変化が検出できた。同方法は子宮頸部胃型粘液産生腫瘍において極めて検出率が高く、極めて有用な方法と考えられる。

P1-29 免疫および粘液染色は悪性腺腫の診断に役立つか

国立病院機構大阪医療センター

榊原敦子, 永野忠義, 松本久宣, 堀江昭史, 高橋秀元, 山田成利, 平野 剛, 岡垣篤彦, 伴 千秋

【目的】近年の画像診断の普及により、悪性腺腫との鑑別を要する症例が増加してきたが、その病理学的特徴上、病変が小さい場合は特に診断困難である。今回、免疫染色および粘液染色を施行し、その診断的有用性について検討した。【方法】1992 年 12 月から 2003 年 2 月までの約 10 年間、当院で悪性腺腫と診断した 10 症例、内頸部腺癌 9 症例 (高分化 8 例, 中分化 1 例)、悪性腺腫と臨床的・組織学的な鑑別に労した 5 症例 (glandular hyperplasia, deep nabothian cyst を含む) を対象として、免染 (HIK1083, CEA, p53, Ki67) および粘染 (AB/PAS) を施行し、染色性の違いについて検討した。【成績】悪性腺腫の臨床進行期は、Ib 期 8 例, IIb 期 2 例で、手術療法は、広汎子宮全摘が 3 例、広汎子宮全摘・傍大動脈リンパ節郭清が 7 例であった。悪性腺腫の 10 症例のうちの免染陽性症例数は、HIK1083; 8, CEA; 1, p53; 2, Ki67; 4 であり、内頸部腺癌の 9 症例では HIK1083; 0, CEA; 8, p53; 1, Ki67; 6, 悪性腺腫との鑑別に労した 5 症例では HIK1083; 0, CEA; 1, p53; 0, Ki67; 0 であった。AB/PAS については、内頸部腺癌全例の癌病巣のほぼ全範囲、悪性腺腫 9 症例の 10~100% の範囲で、染色性が弱い傾向を認めた。一方悪性腺腫との鑑別に労した 5 症例では、全例全範囲で強く染色された。【結論】HIK1083 および AB/PAS 染色は、悪性腺腫の補助診断にある程度役立つ可能性があるが、例外も存在するため、それ単独では診断の要とはならず、更なる検討が必要と思われる。

★P1-30 子宮癌細胞におけるテロメラーゼ導入または阻害による放射線、薬剤感受性の検討

金沢大

中村充宏, 京 哲, 水本泰成, 田中政彰, 金谷太郎, 毎田佳子, 橋本 学, 井上正樹

【目的】テロメラーゼはテロメアを伸長する酵素として癌細胞特異的に活性化されており、テロメア伸長を通じて細胞に永久増殖能を賦与するが、最近テロメア伸長以外の未知の機能についての報告がなされている。今回我々は癌細胞のテロメラーゼを RNA interference により阻害すること、あるいは正常細胞にテロメラーゼを導入することで、テロメラーゼのテロメア伸長以外の機能について検討し、新たな知見を得たので報告する。【方法】子宮頸癌細胞 HeLa の hTERT を RNA interference により抑制し、テロメラーゼ活性が消失または減弱した細胞を樹立した。またヒト正常子宮内膜上皮細胞に HPV E6/E7 および hTERT を導入しテロメラーゼ活性を獲得した不死化細胞を樹立し、これらの細胞の増殖能や放射線および抗癌剤に対する感受性を検討した。【成績】これらの細胞に X 線照射したところテロメラーゼ活性を阻害された HeLa 細胞では著明な感受性増強効果を認めた。また抗癌剤である Cisplatin, Paclitaxel 投与では感受性に差を認めなかったが Doxorubicin, CPT-11, Bleomycin, Etoposide 投与ではテロメラーゼ活性を阻害された細胞に感受性増強を認めた。一方、テロメラーゼ導入内膜細胞は放射線抵抗性、および Doxorubicin, CPT-11, Bleomycin, に対する薬剤抵抗性を示した。【結論】正常細胞、癌細胞の双方においてテロメラーゼ活性の存在は放射線及び抗癌剤感受性に影響を与えた。この現象は DNA break を引き起こす治療のみに認められたことよりテロメラーゼが DNA 修復に関与している可能性が示唆された。これらの知見はテロメラーゼ阻害剤の臨床応用において極めて有用な情報を提供する。